

大学出版

No.45

2000
春



大学と社会を結ぶ
知のネットワーク

The Association of
Japanese University Presses
大学出版部協会



読書の周辺 魚名の由来 ▼ 坂本 一男 — 1

読書の周辺 「諦念と悟り」の文化 — 日本人は理科好きか? ▼ 松田 良一 — 7

大学出版部設立の動きと今後の展望 — 組織委員会報告 — ▼ 伊藤 八郎 — 12

歩く・見る・聞く 知のネットワーク 18 — 15

大学出版部ニュース — 17

新刊案内 2000.1.3 — 26

表紙イラスト II ヨーロッパ・アマン 『職人図鑑』より
 大学出版部協会マーク・デザイン II 道吉 剛

〈書籍の表示価格は税別です〉



大学出版部協会ウェブサイト
<http://www.ajup-net.com/>

魚名の由来

オオクチ・ソゲ・テックイ・ミビキ……。ある有名な魚のいろいろな地方での呼び名の一部である。どんな魚かわかりであろうか。オオクチは中国・四国周辺の、ソゲは千葉・神奈川県、テックイは北海道の、そしてミビキは富山県でのヒラメの呼称である。もちろん、これですべてではない。代表的なものだけでも三十以上ある。

『国際動物命名規約』によれば、どの言語の名称であれ、学名 *scientific name* 以外の名称はすべて俗名 *vernacular name* である。ヒラメ（と日本で一般的に呼ばれている魚）の場合、学名 *Paralichthys olivaceus*（パラリクテウス・オリウァケウスのほかに、ヒラメ（標準和名）・オオクチ（日本の地方名のひとつ）・Bastard halibut（英名のひとつ）・牙鰩（中国名のひとつ））などの俗名を多数もっている。学名は、ある種が新種として発表されるときに与えられるもので、ラテン文字で綴られる。標準和名は単に和名ともいわれ、たとえばそれまで日本人になじみの深い

坂本 一男

魚であれば、明治以降に地方名の中から研究者によって選ばれ、今日定着したものである。魚によっては、名前が地方ごとに異なるだけでなく、季節や成長に伴って変わる場合もある。たとえば、桜の時期のマダイはとくにサクラダイと呼ばれる。ブリの場合、成長につれてワカシ↓イナダ↓ワラサ↓ブリ（関東）やモジャコ↓ワカナ↓ツバス↓ハマチ↓メジロ↓ブリ（関西）と呼称が変わる。出世魚といわれる所以である。

現在、日本とその周辺海域には三千七百種ほど（世界では二万五千種以上）の魚が分布することがわかっている。一方、魚名については、地方名の数があまりにも多く（たとえば、メダカには数千の地方名がある）、標準和名以外の魚名の総数は推定すら困難である。今となっては不明なものもあるが、ひとつひとつの魚名にはそれぞれ由来があり、時には命名にまつわるエピソードもある。ヒラメについていえば、“ひらめ”という名前は室町時代から現れたも

ので、扁平な体形の魚を意味する平魚ひらめに由来すると今日では一般に考えられている。ところがこれには異論もあって、たとえば新井白石は「其眼の側にある……」として眼の位置に注目した命名と考えていたのである。

ここでは、日本最古の魚名が記録されている『古事記』と最近の命名の例として「新顔の魚」を取り上げ、日本における魚名の由来について考えてみたい。

『古事記』の魚たち

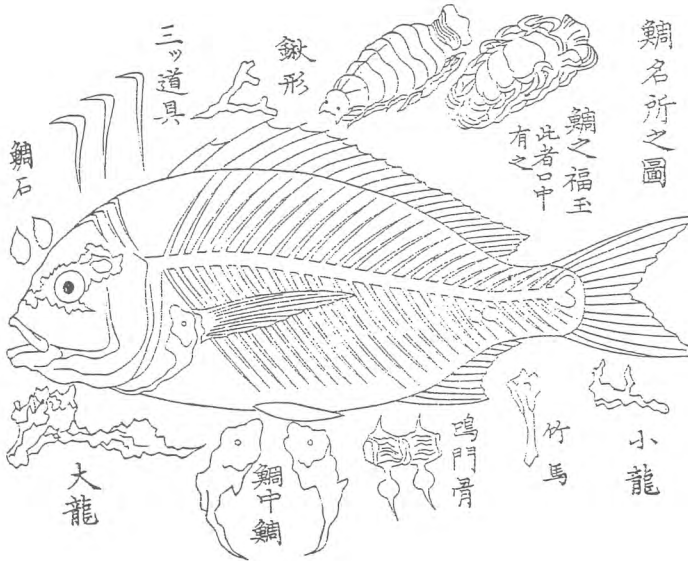
『古事記』には「わに」・「すずぎ」・「たひ」・「あゆ」・「しび」の五つの魚名が登場する。最初に出てくるのは和邇わにである。爬虫類の「ワニ」ではなく、「サメ」のことである。大國主神の章に、淤岐嶋（隠岐）の兎が稲羽（因幡）に渡りたいと思い、「サメ」を騙したために丸裸にされたことが出ている。『出雲風土記』では和爾わにや沙魚さか、『壹岐国風土記』（逸文）に鮎あはむ、『日本書紀』には鰐わに・鰐魚わに・熊鰐などとして登場する。このためであろうか、山陰地方では「わに」は近世までサメ類の方言となっていた。鮫という字は平安時代から使用されるようになったもので、当時の辞書『倭名類聚鈔』（『和名抄』）には「鮫 和名佐米……」とある。「さめ」の語源について新井白石は、「さ」（狭）「め」（眼）で眼が小さいからと考えた。このほか、「さ」（沙）「み」（魚介）のことで、皮が砂のようにさらさらしているからとか、「いさ」（斑）「め」（魚）で斑紋のある魚とする意見

もある。

大國主神の章にスズキ（鱸 訓鱸云須受岐）を料理したことが出ている。『出雲国風土記』にも、南の入海（中海）に鱸（ボラ）・鎮仁（クロダイ）・須受すずきなどがとれると記されている。『万葉集』では鈴寸とある。中国では鱸は四鰓魚ともいわれ、スズキではなく、カジカ科（カサゴ目）のヤマノカミではないかと考えられている。『和名抄』（平安時代）には「鱸 和名須々木」とある。

「すずぎ」の語源については諸説がある。貝原益軒は「すずぎ」のように身が白いからとし、新井白石は「すず」（小さい）「ぎ」（鱸）のこととした。また、「すず」（神聖）「け」（饌）で、神に食物として供える魚であるとか、「すず」（清）「き」（魚）または「すず」（細）「き」（魚）で、形の美しい美味な魚のことではないかとの考えもある。出世魚のひとつで、江戸時代の『本草綱目啓蒙』にも、江戸では一年を「せいご」、二年を「ふっこ」、三年を「すずぎ」とい……とある。

火遠理命（山幸彦）の章に、山幸彦が兄の火照命（海幸彦）から借りた鉤（釣針）を魚にとられ、その鉤を探しに龍宮にいった時、「赤海鰐魚が詮議され、その喉に鉤が刺さっているのが発見された話が出ている。この魚が「たひ」（マダイ）である。『日本書紀』にも同じような話があるが、こちらでは赤女（マダイ）と口女（ボラ）が詮議され、口女から鉤が発見されている。本書では、（海）鰐魚・赤女・



鯛名所之圖

鯛の九つ道具
 三ッ道具（上神經棘）；鯛石（扁平石）；大龍（前鋤骨・上篩骨・側篩骨・副蝶形骨）；小龍（準下尾骨）；鯛中鯛（肩胛骨・鳥口骨）；鎌形（第一神經棘）；竹馬（第二尾端椎前脊椎骨の血管棘）；鳴門骨（肥厚した血管棘）；鯛之福玉（寄生性の等脚類の一種タイノエ）。奥倉辰行（1857）の『水族写真』（東京大学総合図書館所蔵）より。

鯛魚・赤鯛・鯛女などさまざまに表記された。『肥前国風土記』には、「海には……鯛、鯖……あり」とある。『万葉集』でも鯛。もともと骨が柔らかい魚のことである鯛を「たひ」に当てたのは、まんべんなく調和がとれて、どこでも見ることができる（周、あまねく）魚であるからではないかと考えられている。平安時代の辞書『和名抄』には「鯛 和名^{たひ}」とあり、『延喜式』には平魚とも記されている。時代とともに「たひ」は多くの書物に見られるようになり、安土桃山時代の『日葡辞書』には「Acamedai アカメダイ、Volira ヲヒラ（「たひ」の女房詞、宮中の女官の詞）」などが出ている。

江戸時代になると辞書・本草書・産物誌・料理書などが数多く出版されたが、ほとんどの書物で「たひ」のことが取り上げられている。この頃には、黒鯛と区別するために真鯛と呼ばれたこともあった。本草学者は鯛より棘鱗魚^{なまご}は背鰭のことで、背鰭に棘のある魚を好んだという。「たひ」を「まだひ」と表記するようになるのは明治もしくらくしてからのことである。

ところで、江戸時代には多くの図譜が描かれたが、外形を写生したものがほとんどであった。しかし、大変珍しいことに後期には「たひ」の骨格図が描かれている（図参照）。「たひ」の語源について、「た」（平ら）「ひ」（魚）からとするのが一般的であるが、異論もあって、たとえば貝原益軒は朝鮮語の「トミ」（道味魚または棹尾）「から」としている。

かつて、渋沢敬三は『日本魚名の研究』で、「タイ」はコイ・アユ・サバなどと同じように、魚名としての歴史も長く、今では意味や由来のはっきりしない一次的魚名であると思なした。語源はさておき、「タイ」が今ではあまねく知れ渡った名前ということだけは間違いない、現在知られている日本産魚類約三千七百種のうち約三百五十種の和名の語尾は「タイ」である。しかし、日本産のタイ科はマダイ・チダイ・クロダイなど一三種にすぎない。また面白いことに、本家のタイ科にはキチヌなどのように「タイ」のつかない魚もいる。

仲哀天皇の章に、神功皇后が葦の糸を抜き取り、飯粒を餌にして年魚あゆを釣った話が出ている。『日本書紀』の「神功皇后 撰政前紀」では、この釣りの時、「若し事を成すこと有らば、河の魚鉤飲へ」と（新羅出征の幸先を）占った（神意を問うた）ことが記されている。これが、本来ナマズを指す鮎あゆがアユに当てられた理由といわれる。当時アユは全国でとられていたようで、『風土記』では常陸・出雲・肥前ほかで産することが記されている。『万葉集』にはこの魚を詠んだ歌が一五首もある。奈良時代には、年魚のほか細鱗魚・阿喩・鮎・阿由・安由などさまざまな表記された。平安時代の『和名抄』には「鮎……和名安由……」とある。年魚はアユが一年で一を生を終えることからである。近世まで、鱒魚・香魚・王魚など実にさまざまな漢字が当てられた。

「あゆ」の語源について、貝原益軒は、「あゆる」は「落ゆる」で、アユが秋に産卵のために川を下るからといい、新井白石は「あ（小）」「ゆ（白いもの）」で、白い小魚とした。「あへ」（饗）や、「あ」（愛称）「ひ」（魚）の転じたものとする考えもある。

清寧天皇の章に志毘しびや斯毘しびと記されているのは「マグロ」（キハダ・クロマグロなど）と考えられている。『日本書紀』には思寐しびや鮪しびなどと出ている。『出雲風土記』は志毗しびや志毗魚しびいである。『万葉集』では鮪。鮪は鱒の異名で、本来シナハラチヨウザメ（トラザメ・アカエイのような軟骨魚類ではなく、硬骨魚類・チヨウザメ目・ヘラチヨウザメ科の魚である。もうひとつの科がキャビアで有名なチヨウザメ科）のことである。平安時代の辞書『和名抄』には「鮪一名黄類魚 和名之比」とある。室町時代までには「しび」になっていたようで、安土桃山時代の『日葡辞書』には「Xiri. シビ」とある。

「しび」の語源は、「し」（宀、獣肉）「み」（魚介）、または、「し」（宀）「ひ」（魚）であろう。獣のような赤い肉の魚ということである。

『和名抄』の「しひ」は「黄類魚」とあることから、体側の黄色が目立つキハダのことである。しかし、「きはだ」は黄肌からではなく、「き」（黄色）「はた」（鱭）からである。キハダは江戸時代には、「きはだ」・「ましび」・「おほしび」・「はつ」などと呼ばれた。現在キワダと呼ぶこともあるが、

これはキハダの転である。クロマグロはキハダと区別されて、「くろしび」・「ごしび」・「まぐろ」・「めじ(か)」などと呼ばれた。江戸時代にはメバチとビンナガも区別していた。

「まぐろ」の呼称は、真黒や目黒からと考えられている。

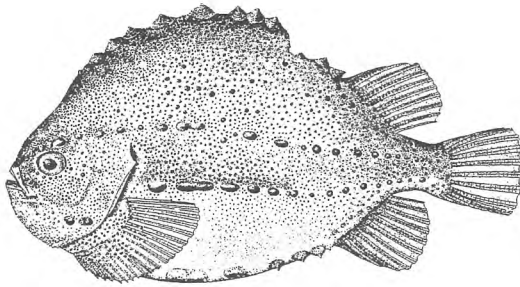
「背が青黒い」、「肉が赤黒い」あるいは「眼が黒い」からであろう。クロマグロが和名として定着したのは新しく、一九六〇年代になってからのことである。現在世界中のマグロ類は七種類に整理されているが、そのうち五種類は日本周辺でも見ることができる。上記の四種以外のマグロであるコシナガは、一九一五年に岸上鎌吉博士(元東大教授、一八六七〜一九二九)によって新種として発表された小型のマグロである。

『新顔の魚』たち

日本でもっとも多くの新種を発表、すなわち学名をつけたのは「日本魚類学の父」といわれる田中茂穂博士(元東大教授、一八七八〜一九七四)で、その数は一七〇にもおよんでいる。しかし、もっとも多くの和名をつけたのは田中博士の二番目の弟子となった阿部宗明博士(おさかな普及センター資料館名誉館長、一九一一〜一九六)である。博士は水産庁の研究所在職中から、分類学的研究のかたわら長年、魚・魚学の普及・啓蒙に務めた魚類学者である。ちなみに、最初の弟子はハゼの研究で有名な富山一郎博士(元

東大・九大教授、一九〇六〜八一)で、ハゼ研究者として世界的に知られる明仁天皇を指導した。阿部博士は新種も三十以上発表しているが、その何倍もの外国産魚に日本語の命名を行った。ドイツ語の辞書などでもヨーロッパの魚に和名をつけたりしていることもあり、その総数は不明であるが、築地に入荷する海外の魚を中心に扱った『新顔の魚』(一九七〇〜九五)(伊藤魚学研究振興財団発行)だけでも百種以上に和名を与えている。

『新顔の魚』の和名を概観すると、阿部博士の命名法はよく知られている近縁の日本産魚類の名前に産地名(分布)や形態的特徴をつけるというものであることがわかる。産地名としては、アメリカ・カリフォルニア・オーストラリア・ニュージーランドなどのような固有名詞のほかに、ニシ(西、主に大西洋)やミナミ(南、南半球)などがある。モト(元)も大西洋という産地を表していることが多い。学名を普及させたヨーロッパ(人)に敬意を払ったのであろう。形態的な特徴としては、オオ(大)・クロ(黒)・シロ(白)・マル(丸)・シマ(縞)などをよく用いた。語幹をみれば日本の近い種類がすぐにわかる。このようにして、アフリカフサカサゴ・ミナミホウボウ・ニシマガレイ・シマアマダイなどが誕生した。命名(和名だけでなく学名も)の際に、形態的特徴や分布などを考慮することは分類学者としてふつうであって、何も博士が特別というわけではない。博士の特徴は、やや単純である、したがってわかりや



ヨコヅナダングオウオ

阿部宗明博士の愉快な命名。

北大西洋に分布するカサゴ目ダングオウオ科の魚で、体長60cm、体重10kgになることもある。

Whitehead *et al.* eds. 1986. Fishes of the North-eastern Atlantic and the Mediterranean. UNESCO. より

すいこと、そしてなによりも「食用」という点を強く意識していたことである。「新顔の魚」を一般に普及させたいという願いを名前にこめた。マルアナゴ（一九八九年命名）はその典型であろう。これは、南米では美味とされているウミヘビ科の一種で、もちろん爬虫類ではなく、ウナギ・ハモ・マアナゴなどの親戚である。しかし、博士によれば、これはマルウミヘビではなくマルアナゴである。

もちろん、例外も多く、生態的特徴をつけたり、現地名をそのまま当てたりもした。中には愉快なものもある。一

九七八年、カサゴにそっくりな魚が新種としてソ連（当時）の雑誌に発表された。この時、阿部博士はニュース番組の中で「日本の魚類学者が気づかずウツカリしていました。それでウツカリカサゴと名づけました」と答えられた。このほか、卵がキャビアの代用になる北大西洋のランプフィッシュ（日本のホテイウオやダングオウオの仲間）につけたヨコヅナダングオウオも愉快な名前である（図参照）。

ところで、東京都中央卸売市場（築地市場）には、ほかの魚に混ってきたものや稀にしか見られない魚も含めると、ここ数年で七百種近くが入荷している。このうち、約百五十種が海外からのものである。和名のない魚は、現在、産地名とともに日本の近い種類の名前で呼ばれることが多い。日本人の食材として定着しそうなものについては、近い将来和名をつける必要があるかもしれない。責任を少しだけ感じはじめている今日このごろである。

尚、本稿は『食料市場新聞』平成二二年一月一日の拙文に加筆したものである。

（おさかな普及センター資料館長）

「諦念と悟り」の文化

日本人は理科好きか？

松田 良一

高速増殖炉「もんじゅ」のナトリウム漏洩事故、東海村の核燃料製造施設における臨界事故、度重なるロケットの打ち上げ失敗、山陽新幹線のトンネルコンクリート崩落事故など、わが国の科学・技術の実力と技術者のモラルに疑問を抱かせる事件が相次いだ。

一方、教育界では「理科離れ」、「理数系の学力低下問題」が表面化してきている。一九九五年に実施された第三回国際数学・理科教育調査 (The Third International Mathematics and Science Study (TIMSS)、小学校三・四年、中学校一・二年、高校三年生を対象とした学力調査) では日本は成績は良いものの、「理数系科目を好きな生徒の比率」が参加四六カ国中、最下位から二番目であった。一九九六年のOECD報告書では「一般市民の科学技術に関する知識をもっている市民の割合」や「科学技術に対して関心を持っている一般市民の割合」が調査した先進一四カ国 (G7を全て含む) 中、最下位であった (データは

『日本の理科教育があぶない』三〇五―三三四 (学会センター関西 一九九八年刊) 風間晴子「国際比較から見た日本の『知の営み』の危機」より引用)。

さらに、昨年十二月に公表された第三回国際数学・理科教育調査の第二段階調査 (TIMSS-Repeat: 略称TIMSS-R) で日本の中学二年生 (五〇〇〇人) を対象とした「数学や理科に対する意識」においても、四年前に比べてそれらの教科への退屈感をもつ生徒の割合が数学七%、理科三%増加し、「数学あるいは理科が生活の中で大切だと思う生徒の割合」が数学、理科ともに九%減少し、「将来、科学を使う仕事につきたいと希望する生徒の割合」も数学では六%、理科では一%減少している。

もともと日本人は理科好きなのだろうか？

この質問にはそう簡単には答えられない。質問の設定に問題があるとも言える。しかし、敢えて私は、日本人は理

科好きではなかったという立場で議論を始めたい。

私事にわたり恐縮であるが、私の実家は曹洞宗の寺院である。生まれる前から将来の職業が決まっていたことの理不尽さにさんざん悩まされながら、大学卒業後の半年ほど、私は住職資格を取るべく僧堂に入って仏道修行の生活を送ったことがある。そこで、経文を読み、何度か高僧といわれる人と生命についての問答を交わす機会を得た。じっと座っていると次第に草木の気持ちが分かるようになるのが座禅の心だという。仏典いわく「禽獸草木みな同じ」。

ある時、私は寺の高僧（後の鶴見山総持寺副住職）に言った。みた。「生物学ではDNAの遺伝情報はコドン表という動物も植物も共通の暗号ルールで書かれていることが一九六〇年代によくよく見つけられた。つまり「禽獸草木みな同じ」を科学的に証明することができたわけです。私は高僧がそれを聞いて、やはり仏教は正しかったな、と喜ぶと思ったが、彼は意外なことを答えてきた。「今頃になつてようやくそれがわかるのは気の毒に。仏教ではそんなことは二千五百年以上前に直観で分かるとるわ」。

日本に曹洞禪を伝えた道元禪師は「春は花 夏ホトトギス 秋は月 冬ゆき冴えて涼しかりけり」という歌を残している。「本来の面目」という題がついているこの歌は、この宇宙の森羅万象の変化をすべて肯定的に受け入れる静かな心のありようを詠んでいる。疑い、悩み、怒りを抱かず、運命に従う。そこに安らぎを見出す。その「諦念と悟

り」が仏教の真髄であるという意味らしい。

寺での生活は、ただ朝早くから黙々と経を唱え、疑問を持つ心を殺して、ただ修行に励む。「威儀即佛法」といつて古来からの教え通りの形に従い、経文の意味など詮索せずにそのまま受け入れる。まさに諦念である。孫悟空でお馴染みの三蔵法師らが天竺から膨大な仏典を持ち帰り、中国の僧たちはその意味を理解すべく、膨大な仏典の漢訳作業を行った。その一つが今読まれている「般若心経」である。

しかし、その漢訳された仏典を日本に持ち帰った当時の学僧たちは漢語に堪能であったためか、それを自国語に翻訳せず漢文のまま理解し、これを唱えた。時代を経るに従い、漢語を理解しない僧が大勢を占めるようになっても諦念をよしとするためか、自国語で経文を読む習慣は現代に至るまでほとんどない。解釈を始めれば、それは仏教哲学であって、宗教ではないと言わんばかりである。

同様に、道元以後もわが国では「本来の面目」を認識の到達点とし、四季の発生機構に疑問を投げかけ、それが地軸が公転面から二三・五度の傾きによって生じることに付き着いた人はいなかった。「禽獸草木みな同じ」と仏典から学んでも、そこから出発して分析的実証的に生命理解に至ろうとした人もいなかった。

どうも、この傾向は現代の日本人もあまり変わってはい

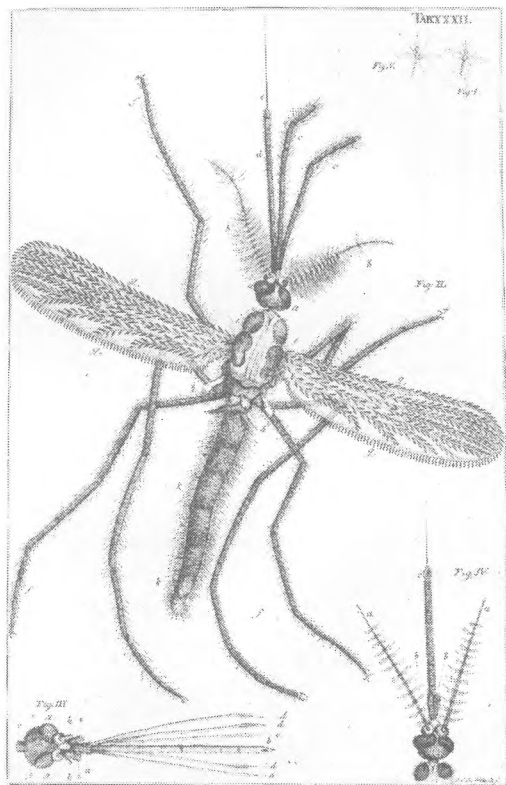


図1 『自然の聖典』中の蚊の顕微鏡観察図

ないのではないか？ 解説や議論を軽視し、自らの研鑽と悟りによって学を深めることをよしとする姿勢は日本の文化とも呼べるもので、いまの理科系大学院教育においても主流である。口語でしつこいほどの解説を加え、徹底的な議論を重んじる西洋の文化はアメリカの理科系大学院教育にはつきりと見ることができらる。

もう一つの例を挙げたい。話は江戸時代後半のこと。当時の鎖国政策の唯一の免除地区であった長崎の出島ではオランダ人たちがたくさんのヨーロッパの書物を持ち込んで

いた。その本を見る機会を得た一部の日本人は好奇の眼差しで眺めたのだろう。

いま、私の手元には二冊の古ぼけた本がある。一つは『紅毛雑話』（オランダざつわ、森嶋中良著、一七八七年）という、日本に初めて顕微鏡を伝えた書物として有名な和本。もう一冊はその『紅毛雑話』のミコラスコーピュン（顕微鏡）の章に引用されている『自然の聖典』（オランダ人、ジャン・スワンメルダム（一六三七—一八〇〇）の生物、とくに昆虫の詳細な形態学的記載。一七三七年出版）の原本である。

その『自然の聖典』にはさまざまな生物が実に多様で精緻な構造を持つことを示し、昆虫に限らず、蛙や蛾の観察・解剖、蛙の卵の発生過程や、筋肉収縮の前後で筋肉の総体積が変わらないことを示した実験など、数々の興味深い事柄が記載されている。その中には蚊や蠅の見事な顕微鏡観察図がある（図1）。その図をそっくり模写したものが『紅毛雑話』の数ページを飾っている（図2）。森嶋の伝えた『紅毛雑話』はオランダ人からの奇聞を当時の日本人に伝えた書として有名になった。しかし、西洋自然哲学（科学）の知見

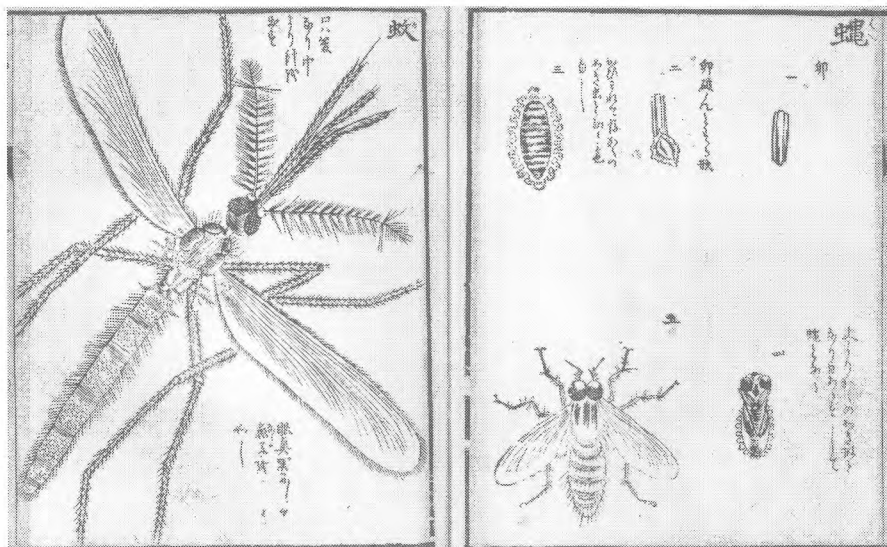


図2 『紅毛雑話』中の蚊と蠅の模写図

を伝える類書とともに、これらがきっかけとなって、日本において近代の実証科学の萌芽と体系化に至らなかったことは残念ながら事実である。和算や本草学など日本独自の展開をみせた分野もあったが、今日の自然科学の発展につながったとは言い難い。

明治になって、日本政府は近代化政策のもと、ヨーロッパの先端的学者たちの一部を「お雇い外国人」として日本に破格の高給で招き、また、優れて理解力の高い日本人学徒をヨーロッパに留学させ、当時の近代科学の先端を受け入れようとした。その頃のヨーロッパの学問はすでに分化が進み、哲学から倫理、文学、科学への分化は言うに及ばず、自然科学も物理学、化学、生物学などに分かれ、さらにそれらの領域も細分化が進行しつつあった。いや、その百年以上前にすでに百科全書派による学問諸分野の鳥瞰的整理を必要とするまでに学問の分化は進んでいた。アメリカの大学における最高学位は今でも学問分野を超えて一樣に哲学博士 (Doctor of Philosophy) と呼ばれ、学問のルーツが共通であることを示す名残りを止めている。科学は文化の一つであるという認識がその背景にあるのだろうか。わが国は既に分化をほぼ終了した段階の学問諸分野を別々に習得した。持ち前の吸収力と勤勉さで、近代学問が共通のルーツから発しているという歴史的必然性を持たないまま、これらの分化した諸学問を身につけてきた。応用に結びつくものなら何でも吸収し、それらを立国の礎に使って

きたわけだ。

戦後の復興期においても、工業の発達を促すための技術とそれを支える自然科学は、やはり、ルーツを問わなくても十分に吸収され工業生産を拡大することができた。お陰でわが国は未曾有の経済成長を遂げるに至り、物質的繁栄は世界のトップクラスにあるとも言える段階になってきた。

しかし、それまで深い意味など分からずとも、ただ唱えていればよかった経文であったが、今日ここに至ってそのルーツや哲学の理解なしには進めない段階に入ろうとしているのではないか。

問題は教育である。高校では生徒たちをその早期に文科系と理科系に分け、理科に弱い文科系生徒と文科に弱い理科系生徒を大量生産している。さらに現行および平成十四・十五年から施行される中学校と高校理科学習指導要領により、授業時間数や科目数、そして学習内容の大幅な削減が進みつつある。ミニマム化した教科内容により、かえって分かりにくい教科書を作り、結果的に生徒たちに内容を面白く理解させるより、ますます丸暗記することを求めることになる。そうであっても日本の子供たちは、相変わらず、すでに出来上がった概念や知識の吸収に励むだろう。

「威儀即仏法」で済ませ、教えられた形のまま受け入れる。諸学問のルーツに言及することなく、哲学のない不均衡な理科教育を長年にわたり行ってきたことが、技術の信

頼性低下や「理科離れ」をもたらしたのではないだろうか？「諦念と悟り」の文化は、自らの頭脳で課題を見出し、徹底的な議論と実験による検証を命とする学問にはそぐわない。私には「諦念と悟り」の文化は「理科離れ」の根源と深く結びついているように思える。

こんなことを書いていると絶望的になってくるが、私は一方では、もしかしたら「諦念と悟り」が救いになるかも知れないと密かに思っている。科学や技術は結果的に人の生命や生活を脅かすこともある。それに対して「諦念と悟り」は人の幸福とは何か、という西洋の近代科学や技術にない視点を提供し、物質やエネルギー消費を抑えて高いQOLを追求する新しい生き方を提起する可能性があるからである。

さらに「諦念と悟り」は生命の多様性など、地球上の複雑系システムを考えるうえで新たな視点をもたらす可能性もある。日本人の「諦念と悟り」の文化が二十一世紀の学問の発展に別の視点から貢献することを期待したい。

追記・私共は高校と大学教育の接続問題を主に理科教育の立場から議論する「高等教育フォーラム」という団体を作っております。ホームページ (URL) は <http://matsuda.c.u-tokyo.ac.jp/forum/> もご覧になり、お考え・御意見を ご投稿願います。(東京大学教養学部生物學 助教授)

大学出版部設立の動きと今後の展望―組織委員会報告―

伊藤 八郎

■大学出版部設立などの最新情報

まず、もっとも新しい大学出版部についてお知らせします。それは昨年一九九九年九月九日に設立された「東京都立大学出版会」で、東京都立大学開学五十周年を記念して設立されました。何ととってもその特徴は、公立大学の出版部の第一号であることです。

特に、大学自体がたいへん力を入れており、予算的な措置として「特別研究奨励費（出版奨励）」や「出版振興基金」などを設けている点が特筆されます。すでに順次刊行される図書も決まっております、この報告が冊子になるころには、三点程度が出版されているはずであると聞いております。

また、都立大学が所蔵する資料の特徴を生かして、家永教科書裁判関係の資料、あるいは牧野富太郎関係の企画出版など、今後意欲的な出版活動が予定されています。実績を重ねられ、早い時期に大学出版部協会に加入されることを期待しています。

次は、本年四月の総会で大学出版部協会の準会員として入会を希望されている、「関西学院大学出版会」について

ご紹介します。設立は一九九七年四月で、設立の趣意としては「コマージュリズムとは一線を画した情報発信拠点を自らの手で築くことが急務であると考え」「関西学院ならではの個性に裏付けられた書籍・出版物を本出版会から刊行する」こととしています。

すでに、これまで十二点の図書を刊行しており、たとえば『AV原論』などは、朝日新聞が取り上げて話題となりました。しかし、何ととってもユニークなのは「関西学院大学出版会博士論文データベース」を設けたということです。

簡単にご紹介しますと、インターネットで全国に博士論文の登録を募集します。登録された論文をこれもインターネット上で目録表示し、閲覧希望のあった必要部数をオンデマンド印刷で出版するということです。これまでの大学出版部にはない試みで、これが今後どう展開してゆくのかが目ざされるところです。

以上、新設と新加入予定の二つの大学出版部をご紹介しました。この他にも、東京外国語大学、東京学芸大学などで新しく出版部を設立する動きがありますが、またの機会

にご報告させていただきます。

■日本における大学出版部の組織状況

次に、日本における大学出版部の組織の状況はどのようなになっているのかをご報告します。

現在、当「大学出版部協会」に加入している大学出版部は、正会員・準会員合わせて二十五大学出版部で構成されています。一九六三年六月の協会設立時は、十大学出版部でしたから二・五倍の会員数になっています。

さらに、九州大学出版会には九州全県および山口県の二十八大学が加盟し、名古屋大学出版会には県下の十八大学が協力校として参加しており、これらを加えますと全国七十一大学を網羅する一大学術出版団体となっています。

それでは、会員になっていない大学出版部はどれだけあるのでしょうか。『日本の出版社2000』（出版ニュース社）により五十音順に列挙します。

青森大学出版局、京都産業大学出版会、熊本工業大学出版センター、高野山大学出版部、国連大学出版局、女子栄養大学出版部、大正大学出版部、東京理科大学出版会（元会員）、富士短期大学出版部、以上の9校です。

さらに、トーハン・日販などの『取引出版社名簿99年版』によれば、金沢工業大学出版局、皇学館大学出版部、信州短期大学出版部、二松学舎大学出版部、武蔵野美術大学出版部、などがあります。（大学の部局、大学生協など

を除く）また、こうしたデータには掲載されていない大学出版部もいくつかあると推測されます。

■今後の大学出版部設立の展望

さて、二十一世紀を目前にして、大学は社会の変化に対応した新しい「改革」を模索しています。それぞれの大学が独自の教育理念と教育目標を掲げ、それにもとづく个性的な大学づくりがさし迫った重要課題となっています。とくに国立大学では「独立行政法人」化、という激変に直面しています。

このような状況のなかで、近年大学出版部の設立をめざす大学がとくに多くなっています。先に二つの大学の設立について報告しましたが、当協会加盟の二十五大学出版部のうち、ここ十年ほどの間に設立された大学出版部は、聖学院大学出版会、麗澤大学出版会、京都大学学術出版会、大阪大学出版会、東北大学出版会、三重大学出版会、と実に6校となります。これにより、国立大学では旧七帝大の大学の全てに出版部が設立されました。

こうしたことの要因として二つ考えられます。第一は、大学における研究と教育の成果の「発信基地」として大学出版部を必要としている点です。大学改革にもとめない、大学の自己評価や開かれた大学づくりといった課題に 대응する点からも、自前で発表機関を持つことに大きな意味があるといえます。第二は、大学が「生き残りの戦略」としての

魅力ある大学づくりの一環として出版部を位置づけている点です。二十一世紀に入ると、大学生の数が激減することは周知のとおりです。この事態を前にして、大学は生き残りが緊急の課題となっているのです。

これに、今日の出版業界が未曾有の不況のなかにあり、学術出版がますます困難になっている状況を重ね合わせれば、今後大学出版部の設立の機運は大きくはなれ、小さくなることはないと考えています。

■大学出版部の発展方向―出版と経営

中国の古典の一節に「創業は易し、されど守成は難し」という言葉があります。たしかに大学出版部の設立も容易ではないのですが、それを継続し発展させることはまことに容易ならざることといえます。当然のことながら「出版と経営」というテーマがあるからです。

ここで、平成八年に設立されて大学出版部協会にも準会員として加入された「東北大学出版会」運営方式をご紹介します。それは次のようなものです。

「まず、出版会発足後も、東北大学後援会からの資金援助を引き続き数年間お願いしていくこと、編集や営業関係の専任者は当面雇用せず、無報酬のボランティア活動によって編集や営業の業務をこなしていくこと、原稿よせてくださる著者にも、初版の印税は辞退していただき、さらに著書の一部を買い上げていただくなど犠牲を払ってもらうこ

と、といういわば「三方一両損」でスタートすることになった。出版会の関係者全員がそれぞれに犠牲を払うという方式である。これを「東北大学方式」と呼ぶ向きもあるという。」（「大学出版部協会二十五周年の歩み」より）

これにより、三年余の間に二十八点の図書が刊行されています。まことにユニークといわざるをえません。スタートの仕方としては、一つのアイデアだと思います。

従来、国立大学では、人と金がある生協からスタートして、実績を重ねたのち募金活動を行って、財団法人化して経済的基盤を確立する――東京大学出版会がそうでしたし、典型的には「名古屋方式」といわれた名古屋大学出版会があります。しかし、東北大学のような方式も、今後の国立大学の大学出版部の運営方式としては、有効だと思われる。

私立大学では、その組織の形態から運営方法までいろいろなケースが選択できると思いますが、やはり母体大学との関係で、出版部としての特色ということがポイントになるでしょう。

大学そのものの大変容に直面して、大学出版部もまた大きな転換の時期を迎えております。大学出版部は「出版という仕事を通じて大学の機能に参加する」という基本枠組を踏まえながら、同時に、もっと別の新しい役割や機能に挑戦していくことが期待されているのではないのでしょうか。

（名古屋大学出版会）

近・畿の宝探し

八尾市立歴史民俗資料館を訪ねて

旅行したおりに、地域の有名無名の郷土資料館や博物館を尋ねるのが、私の密やかな趣味である。「資料館はその地域のタイムカプセルなんだ。」とは、同行を強いられて、嫌がる家族への口実で、要は物好きの性にしかすぎない。

学術、文化のために貢献せんという気概を持つ資料館等関係者には、おそらく招かざる客ではないかと自認している。それでも、数をあたると、その熱意の有無、善し悪しについては多少なりとも理解出来るようになる。それは、箱の大小、設備の新旧ではないようだ。今回訪れた八尾市立歴史民俗資料館も、そのような、良きものの一つである。

八尾市（河内地域）は、他府県の人からすれば、忘れられた土地かもしれない。辛うじて、小説『悪名』の作者や、河内音頭で記憶されている程度であろう。しかし、実際は、豊潤な歴史の宝庫なのだ。その一端を、このコンパクトな資料館から、充分伺い知ることが出来る。

展示室で、まず目を引くと言えば、まちがいもなく、流水文銅鐸（弥生時代 跡部遺跡）だろう。その小ぶりなが

ら、繊細で美しい姿は、約二千年前に作られたものとも思えない新鮮さに満ちている。この重要文化財の銅鐸を筆頭に、数々の出土物が、わかりやすい解説と共に展示されているのだ。

この門外漢でも堪能出来る出土物の豊富さは、生駒山を後背に、大阪府下でも、有数の古墳群地域を抱えていることと無関係ではない。西の山、花岡山、向山の、古墳時代前期の前方後円墳。府下最大の規模の石室を持つ愛宕塚古墳。横穴式石室の高安千塚等群集墳、同時代後期の前方後円墳。また、弥生時代から古墳時代にかけての集落遺跡も、多数存在し、渡来系文物や古備系土器の宝庫となっている。言うまでもなく、これら考古資料だけではない。美術工芸品、古文書、河内木綿関係資料、歴史資料、民具と多岐にわたり、時代も旧石器時代から昭和までカバーするものとなっている。

河内木綿関係資料は、かつて日本で愛用された「手織木綿」研究の第一人者である故辻合喜代太郎博士が、研究

の為に収集した染織資料約二四〇〇点が寄贈されたものであり、日本の生活文化を知る上で、貴重なものだ。

古文書関係等も、専門の学芸員を擁するだけあって、その特色となっている。折しも、企画展『古文書からみた江戸時代の久宝寺村』が開催されていた。八尾市西部の久宝寺地区は、戦国時代、畿内有数の寺内町として発展し、江戸時代は、久宝寺村として、幕府の支配を受けていた。周辺地域の物資の集散地として賑わいをみせていたのである。同村庄屋である高田家の古文書を通じて、景観、人々の動向、村の支配、河川の利用、幕末の政局と村、多角度からせまり、江戸時代における村の姿を、生き生きと再現する構成となっている。

見学に一区切りをつけ、館長の棚橋利光氏にお話しを伺ってみた。実は、館長は、我が大阪経済法科大学出版部刊行の『河内地域史総論編』の執筆者の一人でもある。

「開館一〇周年にこぎつけた。資料館という名称だが、博物館相当施設。だから、貴重な資料、文物も収めることが出来る。」とのお話に、なるほどと、展示物を頭に浮かべつつ思う。「市井の研究者たちと資料館との共同で企画展を開催している。また、将来的には、自然や史跡に恵まれた地域一帯を、歴史文化ゾーンとし、館としてもその一翼を担い、気軽に訪ねられる場としたい。地域と密接なかわりを持ちながら、運営されているようだ。

余談だが、展示物の、様々な農具や日々の暮らしの用

具等民具は、地元住民の提供に負っている。「私も寄贈したんよ。」と、地元出身の出版部に後で教えられた。彼女曰く、「寄贈者はみな知人」だそうで、資料館の地域との関わりの深さを、改めて思い知った次第。

昨今、新しい世紀を迎えてか、歴史が耳目を集めることが多い。しかし、そこで語られる歴史なるものは、大文字すぎて、日常からかけ離れたものが多い。俄歴史家にいきなり身を置くのも良いが、まず、自分の足元地元から、辿って見るのも、大文字を考える上でも、必要なのではないかと、今回の資料館見学から、示唆を得たのは収穫であった。

最後に、突然の来訪にも、心良く応じてくれた棚橋館長に謝意を表したい。(大阪経済法科大学出版部 中井太郎)



八尾市立歴史民俗資料館

〒581-0862 大阪府八尾市千塚3-180-1

☎0729-41-3601

<http://www.city.yao.osaka.jp/REKIMIN/01index.htm>

開館時間 午前9時～午後4時45分

(入館は午後4時15分まで)

休館日 月曜日の午後・火曜日

(火曜日が祝日の場合は開館、翌日休館)

年末年始 その他

交通案内 近鉄信貴線服部川駅より徒歩8分

大学出版部ニュース



▼人文・社会科学系出版五団体（人文会・法経会・歴史書懇話会・大学出版部協会・国語国文学出版会）は、二〇〇〇年一月二十八日都内ホテルエドモントに於いて、恒例の合同新年会を開催した。各団体所属の会員の他、都内近県の書店、取次会社、業界新聞社ら総勢一九四名が出席した。当大学出版部協会からは、山下幹事長以下、北の北大から南の九州大まで三十九名が出席し懇談の場を盛り上げた。会は今年の幹事団体である人文会代表幹事の菊池明郎氏が冒頭挨拶に立ち「日本経済の不況を出版界もともに受け三年連続のマイナス成長であるが、こんな中にあっても、対前年比二桁成長を遂げている書店や、岩波書店の『日本語練習帳』

の好調な売れ行きもある」ことを紹介し、「工夫と努力により読者の評価を得る事が出来る」と結んだ。

続いて来賓のトーマン書籍営業部阿部信行部長は、実務面から数字で最近の専門書の動きを披露し、「これからは、返品減少を計ることは勿論の事、責任販売制とどのように取り組んでいくか、書店版元、取次がお互い知恵を出し合って行くことが大切」と挨拶した。また氏は「今年はじめて読書年でもあり、読者を引きつける方策の構築、電子メディアの力を有効に活用したい」と述べた。いずれも、これからの「専門書販売」について示唆したものだ。

続いて大阪屋書籍仕入調整部山本良文部長の乾杯の挨拶で懇談会に移り、午後八時の中々まで懇談の会が続いた。



北海道大学図書刊行会

- ▼ロックモア著・奥谷浩一他訳『ハイデガー哲学とナチズム』（A5判・六八〇〇円）生涯を通じてナチズムの枠内にあったハイデガー哲学の全体系を根本から検証。彼の思索の全行程を対象に、膨大な著作・研究書を渉猟してハイデガーに内在するナチズムへの哲学的批判を加える。
- ▼山根正気・幾留秀一・寺山守著『南西諸島産有剣ハチ・アリ類検索図説』（B5判・二五〇〇〇円）南西諸島のハチ・アリ類六〇〇種を収録。インベントリーの要請に応える新タイプの図鑑。環境調査関係者必携の書。日生財団出版助成図書。
- ▼杉森混一・木村和範編著『統計学の思想と方法』（A5判・三八〇〇円）統計の持つ二つの性質間の連関を探り、そこから生ずる認識論的・方法的諸問題を批判的に検討する。二一世紀における社会科学としての統計学のあり方を問う。統計と社会経済分析シリーズ第二巻。
- ▼阿部永著『日本産哺乳類頭骨図説』（B5判・九〇〇〇円）土着種一〇八種と帰化種一三種を一四三頁七一〇枚の精密図版で収録。動物学・考古学研究者はもとよりナチュラリスト必携の図鑑。

聖学院大学出版会

▼鶴沼裕子著『近代日本キリスト者の信仰と倫理』(三六〇〇円)

近代日本のキリスト教に関する歴史・思想史研究は、これまでキリスト教とその思想を日本の近代化の過程に位置づけ、とくにプロテスタント・キリスト教が果たした西欧近代への開明的な役割にその研究の重点を置いてきた。

これに対して、著者は、植村正久、内村鑑三、新渡戸稲造、三谷隆正などのキリスト者たちが、日本の伝統的な「天」の観念、日本の精神的伝統、日本の他宗教、日本人の死生観などにどのように対峙し、キリスト教信仰を確立していったのかを、それぞれの「宗教的原体験」から信仰を内面的に理解しようとする。その信仰理解からこれらの生き方の根本にあった倫理を解明する。この作業を通して、本書は、近代日本におけるキリスト教の役割とその信仰の意味に新しい視点を提示する。

著者は、現在、聖学院大学人文学部日本文化学科教授。著書に原史料から日本のキリスト教史を読み解く、『史料による日本キリスト教史』(二六〇〇円、聖学院大学出版会)などがある。

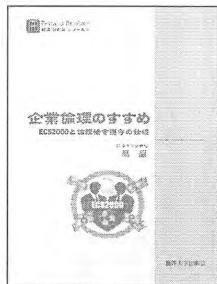
麗澤大学出版会

▼高 巖『企業倫理のすすめ―ECS2000と倫理法令遵守の仕組』(本体六〇〇円)

企業が倫理法令を確実に遵守するための社内の仕組みをどのように作ればよいのか? 本書はこれにわかりやすく丁寧に答えた手引書である。

昨今の企業の不祥事が示しているように、経済のグローバル化、規則緩和が進むにつれ、企業倫理実践のための社内制度確立は企業の盛衰を左右する緊急課題となったと言っても過言ではない。

本書は、この面で先行したアメリカ企業の経験を参照しつつ、麗澤大学経済研究センターが中心となって作成した「倫理法令遵守マネジメント・システム規格」(ECS2000)の全文と、その活用方法が丁寧に解説されていて便利である。



麗澤ブックレット
『企業倫理のすすめ』
本体600円(税別)
A5判・並製・88頁

慶應義塾大学出版会

▼J・C・ホルルト／森岡敬一郎訳『マグナ・カルタ』(二八〇〇円)

英国中世史研究の泰斗ホルルトの名著の邦訳。イギリス憲政史上の最重要文書の一つ「マグナ・カルタ」を12-13世紀の社会的・政治的構造の中で捉えた歴史学的な注解の書。従来の法解釈学的アプローチを超えた画期的研究。

▼清水啓助編著『K. E. i. o. U. P. 選書』『知的創造時代の知的財産』(二〇〇〇円)

デジタル化の時代の中で、特許や著作権・商標といった「知的財産」の存在が重視されてきている。国策として「知的財産」保護を明確にする米国や特許・商標への対応を重視し始める企業など知的財産をめぐる現況と課題を明らかにする。

▼総野和子『日本文化の源流をたずねて』(二〇〇〇円)

わかりやすい話と写真で綴る民俗学からみる日本文化の手引書。折口信夫の教え子の著者が「年中行事」「歌舞伎の発生」「名字の話」など身近な例を取りあげて、日本文化の見方をやさしく語る。民俗写真家芳賀日出男氏の貴重な写真42点を挿入し、民俗学の魅力を満載した好著。

産能大学出版社

▼『私の大学改革』野田一夫著（一五〇〇円）

大学淘汰の時代がすぐそこに迫っている。本書は新しい大学の姿を求めて二つの大学、多摩大学及び早立宮城大学の創設に携わった著者が、改革を成し遂げていった道筋と方法及び内容を述べたものである。大学をいかに社会の要請に応えるものにするか、大学入学者数の激減に対応して経営基盤を確固たるものにするにはどうしたらよいかを著者の具体的な体験のなかから述べている。

▼『オプショナリズム』加藤雄一著（一五〇〇円）

パラダイムが大きく転換している今、日本のマネジメントのあり方、改革が模索されている。著者は、工業化社会の残滓ともいえるべき「社員に忠誠を強いる経営」から、経営者と社員が対等の立場に立つ経営革新策を次々と打ち出してきた。そして、現在行き着いたのが、アソシエイツ制である。それは社員が自らのワークスタイルを選ぶことができるオプショナル制の導入である。本書では、このオプショナルマネジメントを具体的に述べた。

専修大学出版社

▼カトリン・アマン著『歪む身体―現代女性作家の変身譚―』（二四〇〇円）離婚女性の想像妊娠を枠組みとした津島祐子『寵児』、足の親指が変形した女子学生の性の遍歴を描いた松浦理英子『親指Pの修業時代』など、変身をテーマにもつ代表的な五編の小説について、近代小説批判の立場から立論が図られている。

筆者はオーストリア国籍をもつ女性で新進の日本文学研究者であるが、習熟した日本語を駆使しながら論述している。日本の変身譚について、女／男からの脱構築すなわちジェンダー・アイデンティティの多様化を指摘し、変身が疎外の表現ではなく現代社会批判であると、さらに仏教や神道の影響にもふれている。これまであまり批評家に取り上げなかった本質論にいとみ、作品内部の暗喩や隠蔽されたものに迫ろうとした意欲作である。

▼石巻専修大学開放センター編『99開放講座 21世紀への誘い―共存をめざして―』（二四〇〇円）「物質への情熱」「人はなぜ働くのか」「ソウルミシの不思議」「ドイツの有給休暇」ほか14編。

玉川大学出版社

アメリカ西部史に興味をもつ人に読んでいただきたい書物二点を刊行した。

▼G・D・ナッシュ著『朝日由紀子訳『20世紀のアメリカ西部―未来を映す都市オアシス文明―』（五八〇〇円）カフテリアアスパーマーケットはなぜ西部で生まれたのか。巨大な航空機会社、映画会社、軍事施設が西部に集中したのはなぜだろう。太平洋岸に押し寄せた高齢者のために発展した産業とは？ 東部の植民地であったアメリカ西部が、やがて自立し、世界の最先端文化の発信地となっていく姿をダイナミックに描き出す。

▼R・ラム&M・マッカーシー著／井出義光・青木怜子・小塩和人訳『怒れる西部―傷つきやすい大地とその将来―』（五八〇〇円）かつて青い空、無限の地平線、豊かな自然に恵まれていたアメリカ西部は、二世紀にわたる東部（連邦政府）の権力支配と飽くなき資本家の台頭で、環境問題や社会病理に苦しむ地に変貌した。開発か自然保護か、中央政府か地方自治か、その狭間で苦悩する西部の実態をさまざまな面から描く。優れて現代的課題に挑戦する話題の書。

中央大学出版部

▼三富明著『ワグナーの世紀―オペラをとおして知る十九世紀の時代思潮―』（三三〇〇円）ワグナーは彼の総合芸術作品の中で、十九世紀に出現したさまざまな重要な思想や社会問題をとりあげている。例えば、ロマン主義、天才崇拜、芸術至上主義、技術革新、自然破壊、故郷喪失、革命と動乱、資本主義など。

その範囲の広さ、とりあげ方の巧みさ、観点の多様さは他に類を見ない。本書は、『さまよえるオランダ人』以降のワグナーの作品の解説と分析をとおして、彼の芸術の真髓に迫るとともに、十九世紀の時代思潮のエッセンスにふれようとする試みである。ワグナーと何かと縁の深い、ショーペンハウアーやニーチェの思想、ブルーストやソボクレスの作品、及びナチズムにも、折にふれて言及する。



東海大学出版会

▼「虚数の情緒―中学生からの全方位独学法」吉田武著（四三〇〇円）

最近、特に理工学の学力低下が社会問題にもなりつつある。一步一步理論を積み上げていくという、一見地道な学習過程を軽視し、学習効率という美名のもと、結果のみを重視する風潮がそこにはある。しかし、教育は効率で推し量るものではなく、いかなる場面でも応用ができる真の理解を目指すものである。

本書は人類文化の全体的把握を目指した科目分類に拘らない「独習書」であり、歴史、文化、科学など多くの分野が、虚数を軸に悠然たる筆致で書かれている。漢字の多用、電卓の活用なども他に例のない独特のものである。



東京大学出版会

昨年、建国五〇周年を迎えた中華人民共和国は、人の一生でいえば、成熟し落ち着いた中年であるが、果たして落ち着くのだろうか。めざましい経済成長につれ、突然現れた「新興大国中国」は二一世紀にはどこへ行くのだろうか。

▼シリーズ「現代中国の構造変動」（全8巻、各三六〇〇〜三八〇〇円）は、「中国に構造変動は起こっているのか、だとすればどのような構造変動か」を中心テーマに七〇人の中国研究者が三年間にわたり共同研究と議論を重ねてきた成果である。1 大国中国への視座（毛里和子編）、2 経済―構造変動と市場化（中兼和津次編）、3 ナショナルリズム―歴史からの接近（西村成雄編）、4 政治―中央と地方の構図（天児慧編）、5 社会―国家との共棲関係（菱田雅晴編）、6 環境―成長への制約となるか（小島麗逸編）、7 中華世界―アイデンティティの再編（毛里和子編）、8 国際関係―アジア太平洋の地域秩序（田中恭子編）
いずれの巻も、二一世紀の中国理解へ新しいパラダイムを提供する意欲作である。

東京電機大学出版局

あるサービスによって料金を取るというビジネスパターンが発生すると、瞬間に同業者が参入してくる。その競争こそが料金の低下とサービスの普及をもたらしするのであるが、ビジネスモデル自体を特許で保護できないかという最新の議論もある。新しいビジネスモデルが生まれようとしているのだ。無償で提供されて爆発的に普及したLinuxも、OSの販売ではなく、普及とそれによって導かれる創造に価値を見出そうとする新しいモデルの発現なのだろう。

日本でもまた一つ、科学・工学に有益なフリーソフトウェアが、熱心な研究者により開発された。数値解析・行列計算・数式処理を使い易く統合したMATXという統合ソフトである。従来の高額なソフトを利用していた研究者や学生にも朗報となるだろう。以下2冊は、その開発者本人が普及を旨指して著した初めてにして唯一の解説書である。

▼「制御・数値解析のためのMATX」(三五〇〇円) ▼『Linux・WindowsでやるMATX』(五〇〇〇円)共に古賀雅伸(東工大)著、フリーソフトC D I R O M付。

東京農業大学出版会

『ペルー100の素顔』

ペルー100の素顔編集委員会

(一三七頁 一五〇〇円)

最近では、国内外を問わず情報が大量に溢れています。ですから、現代人は、如何により情報に巡り会えるか、または、いかに必要のない情報を切り捨てて行くかが問われます。

このような世の中で、「百聞は一見に如かず」は、たとえどんなに情報網が発達しても、変わりない真理であると思えます。

「ペルー100の素顔」は、カラー写真に解説をほどこしたもので、目で見るだけでも楽しめますし、興味をそそられます。ペルーとはこんなにも世界的な遺跡が多かったのか!と驚かされますし、その反面、ペルーの人々、植物、動物、農業の素朴さを感じさせてくれます。

また、普通の旅行案内とは、視点が異なり、旅をより一層興味深いものにするでしょう。

この本だけでも、ペルーを旅行したような気分が、楽しめると思います。

法政大学出版局

▼小局では、二〇〇〇年一月を期に、ウェブサイトを(ホームページ)を立ち上げました。近刊・新刊のご案内だけの、まことにささやかなサイトですが、これまで新刊案内をお送りできなかった方々に、一人でも多く小局の刊行物を知っていただければ幸いです。毎月末に更新いたしますので、ぜひ、ご注目ください。

また、各出版部ならびに関係諸団体のサイト管理者の皆様には、リンクして下さいますよう、お願いする次第です。



<http://www.terra.dti.ne.jp/~hosei-up/>

放送大学教育振興会

▼放送大学は放送教材と印刷教材を使用して授業を行う通信制大学であり、その印刷教材の編集・発行が放送大学教育振興会の主要業務の一つである。平成十二年度の新刊は七十六点（学校図書館司書教諭講習の教材を除く）、放送大学の第一期に開設される科目は三二〇。

▼放送大学は平成十二年度第一期より教育訓練給付制度労働大臣指定講座を開講する。この制度は、受講資格を有する方が当該講座を修了した場合、入学科・授業料の八割がハローワークから教育訓練給付金として支給されるものである。「教養学部企業会計」コースなど四コースが設置され、十六科目が対象となる。▼平成十年に大学設置基準が改正され、多様なメディアを高度に利用した授業が制度上も位置付けられることになった。これからは、通信手段を活用した双方向性の授業・講義が可能となり、放送大学キャンパス・ネットワーク委員会では大学等の間を衛星通信回線で結ぶスペース・コラボレーション・システム（SCS）の活用について検討を始め、「SCS双方向クラス」の試行を行っている。

明星大学出版部

▼神辺靖光著「教育史散策」。四十年余の教育史研究とともに、中・高・大学で教鞭をとってきた筆者の、世に訴えようとする思いをまとめた珠玉の書。

大学院在籍中、学資を得るために杉並区にあった私立城中中学・高等学校の講師となった筆者は、戦後のアメリカ化一辺倒の時流の中で、威武に屈することなく、孔孟の道を説いた河野通彌太校長に傾倒。河野校長との明治の私塾・私学の反骨、独立精神についての談論が、生涯をかけた教育史研究の端緒となる。昭和四十二年、大学教員のまま財団法人日本私学教育研究所の兼任研究員となり、教育史研究の中で最も手薄だった中等教育史を専攻。昭和戦前期の旧制中学校を舞台としたドラマ「はっさい先生」（NHK放映）の監修者となって全国に紹介される。なお、私立東京文化高等学校の主事として、卒業生や父母を前にした講演や朝礼での訓話、私立中学・高等学校教員のための講演「中等教育史と慶應義塾」「近代日本の学校と私学」も収録。日本の教育を知るうえに手軽な書になっている。

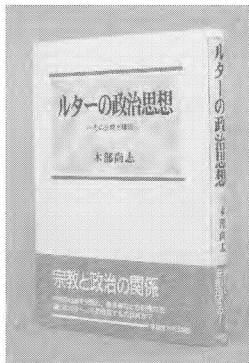
早稲田大学出版部

▼内田滿政治学論集（全3巻）の刊行を開始した。第1巻「日本政治学の一源流」（四七〇〇円）は、政治学とは何か、という観点に立ち、日本政治学の形成に寄与した早稲田政治学の再評価を試みる。

▼「詩画集 死よ 墓より語れ」（フレア詩、ブレイク挿画／出口保夫訳、五〇〇〇円）死に直面した人間の恐怖を描き、魂の不滅を謳う。ブレイクの銅版画収録。

▼「漱石の東京（Ⅱ）」（武田勝彦、二八〇〇円）は、好評を得た『漱石の東京』（同、二八〇〇円）の続編、門、こころ、明暗等の舞台となった明治の東京を再現。

▼「ルターの政治思想―その生成と構造」（木部尚志、四七〇〇円）教会権力と世俗権力を論じ続けたルター。その政治思想が体系化される過程を考察する。



名古屋大学出版会

- ▼S・クレスゲ他編／嶋津格訳『ハイエック、ハイエックを語る』(二二〇〇円) 激動の世紀を生き、自由主義の意味を考え抜いた今世紀最大の経済学者Ⅱ『社会哲学者ハイエックの、興味尽きない回想録』
- ▼西村周三著『保険と年金の経済学』(二二〇〇円) リスクについての考え方を中心に、保険と年金の経済学の基礎を新鮮かつ平易に解説。急激な制度の展開を根本から考えるために必読の一冊。
- ▼籠谷直人著『アジア国際通商秩序と近代日本』(六五〇〇円) 幕末の開港はアジアへの開港でもあった。華僑や印僑らが織りなすアジア通商網との相互作用から、日本の近代史を捉え直した力作。
- ▼下川潔著『ジョン・ロックの自由主義政治哲学』(六八〇〇円) ロック自由主義の諸原理を核心部分において抽出し、その古典的価値を明確に示すとともに、批判的継承を試みる。
- ▼岩坂泰信編『北極圏の大気科学Ⅰエアロゾルの挙動と地球環境Ⅰ』(六五〇〇円) 北極の大気では何が起きているのか。成層圏オゾン層の破壊に関するエアロゾルの動態と役割を明らかにする。

京都大学学術出版会

- ▼『東アジア諸言語の研究Ⅰー巨大言語群Ⅱシナ・チベット語族の展望Ⅰ』西田龍雄著・九〇〇〇円／民族の興亡と移動の歴史とともに、多様な言語の分布をはげしく変化させてきた東アジア。本書は、壮大な構想のもとに周到な分析を重ね、断代と分域の観点から言語群相互の関係を解明しようとする、西田言語学の集大成である。言語学研究者の必読書。
- ▼『脳とワーキングメモリ』岩坂直行編・七〇〇〇円／たとえば——買い物をする。四則演算などの知識と、初めて目にする商品の値段と手に持った金という一時的な記憶を同時に動員して、釣り銭を計算する。この、複数の情報を統合し、現在進行形で処理する記憶の仕組みに迫る。神経科学・実験心理学の最新の成果。
- ▼『森の記憶Ⅰ飛弾・荘川村六郎の森林史Ⅰ』生態学ライブラリー5・小見山章著・二一〇〇円／森林は季節とともに変化し、また歳月を経て変遷していく。著者のホームグラウンドである岐阜県山間部の落葉広葉樹林を中心に、亜高山帯林との比較も交えながら、森が人々の暮らしと関わりつつ移ろいゆく様を描き出す。

大阪経済法科大学出版部

- ▼監修 村川行弘『7・8世紀の東アジアー東アジアにおける文化交流の再検討Ⅰ』(A5判・二六〇〇円) 北京大学で開催された歴史部会シンポジウムの諸報告を中国・朝鮮・渤海・日本の4編に編集し、7・8世紀の東アジア各地の遺跡発掘調査報告と文化交流の解明。チベット古墳群・龍泉府遺跡・黒塚古墳等の発掘報告も収録。
- ▼監修 南 正院『東北アジアにおける経済開発と環境保全』(A5判・二六〇〇円) 延辺大学で開催された環境部会シンポジウムでの環境・経済・生物学等多岐にわたる諸報告を再編集。とりわけ、国連開発計画に指定されている豆満江流域開発計画への政策提言や環境問題・自然保護を求める報告多数収録。
- ▼『刊行予定』監修 能塚正義『東アジア経済の発展と展望』90年代後半、東アジア各国を襲った経済金融危機の分析と新たな経済発展に向けた各国の経済政策と展望の報告。▼伍 躍著『明清時代の徭役制度と地方行政』徭役制度の解明により国家の地方統括の財政的・行政的システムの全体像を解明する。

大阪大学出版会

科研費補助金研究成果公開促進費を得て、博士論文を〈研究書〉にまで高められた格調ある書が三点できた。

▼萱のり子『書芸術の地平―その歴史と解釈―』B5・三一六頁・八〇〇〇円。

文字を書くという行為から書のみしさを分析した、書道家ならではの芸術論。伝統的作品の中に漢字をかなに変容させていく手の運びを見、また漢文・和歌・近代の書も対象として、筆をもつ人の心の動きを読み解いていく。ワープロが席卷する現代、書かなくなつて失うものを私たちに示してくれる。

▼多田望『国際民事証拠共助法の研究』A5・二五〇頁・六〇〇〇円。

証拠が外国に所在するとき、複数国の裁判所間における証拠収集のための協力についての国際司法論。包括的な研究書として貴重な基礎的文獻となろう。

▼川森博司『日本昔話の構造と語り手』A5・二九〇頁・六八〇〇円。

昔ばなしの「語り」で地域おこしをする岩手県遠野の実践例。日本昔話と韓国民話の比較分析。この二つの方向から地域社会の深層とその変貌を探る。

関西大学出版部

▼小川正著『教育新生への視座』（二五〇〇円）教育新生に向けての視座は、多方面にわたつて説明する必要があるが、本書においては、教育現象解析の基底にある根本問題、つまり、「知」の問題に限定して探求を進める。西田・三木・九鬼・上田・中村各氏らの哲学から学びつつ、「近代知」を補い超える「臨床的知」「モザイク的人間観の克服」など、二十の視座を明らかにする。

▼坂出祥伸著『中国思想研究』（七〇〇〇円）中国思想の根底は「気」の觀念であり、感応と修練を特徴とすると説く著者三十年間の多方面にわたる思索の集大成。時代は秦・漢時代の出土資料から明・清時代に至るまで、分野は医療、養生、煉丹、宇宙構造論などの自然認識を包括し、晋の葛洪、梁の陶弘景、唐の孫思邈、宋の沈括、清初の方以智などの思想が縦横に論じられている。

▼網千善教著『日本古代史稿』（三三〇〇円）日本古代史考、飛鳥文化史考、大和風土誌考の三部から構成される。古代大和をめぐる課題に対する模索と試考と見解について記述する。

九州大学出版会

▼ジャン・マビヨン／宮松浩憲訳『ヨーロッパ中世古書学』（B5判・七六二頁・一四〇〇〇円）。中世ヨーロッパに関する文書史料について、真正文書を偽文書から区別する手続きが、歴史学にとって不可欠の前提となる。著者は材質、書体、文体、下署、印章、日付事項から両者を区別する合理的方法を提示する。西洋古書学の金字塔、世界初の現代語訳

▼西村重雄・児玉寛編『日本民法典と西欧法伝統―日本民法典百年記念国際シンポジウム―』（A5判・五六四頁・八五〇〇円）。わが国の民法は、ローマ法以来の長い法伝統の受継と変容の中でそれぞれ成立したフランス民法、ドイツ民法草案の影響の下で編纂された。日本民法の条文とこれら諸民法典との関係を明らかにし、日本民法の条文の歴史的位置を理解する、日独一七名の報告者による比較私法史的研究。

▼第二〇回日本生命財団出版助成図書。
①金宅圭著『日韓民俗文化比較論』（A5判・三七〇頁・八〇〇〇円）。②秋坂真史編著『男性百歳の研究』（B5判・三〇四頁・六〇〇〇円）。

東北大学出版会

▼『種痘法に見る医の倫理』（小田泰子著・二一八頁・二五〇〇円）牛痘法が発見される以前に、天然痘の膿をそのまま人間に植える人痘法が発見されていた。人痘法は医学的に有効か、膿を植えて人為的に病気を与えるとは創造主の意図に反するのではないかと、欧米では約一世紀、激しい論争が繰り返された。本書で再現されたこれらの論争は、現在の新しい医療、臓器移植、出生前遺伝子診断・クローン技術の人への応用等についての論争と多くの類似点を見い出せる。

▼『心の科学史―西洋心理学の源流と実験心理学の誕生』（高橋滯子著、三〇五頁、五〇〇〇円）本書は、今日の、いわゆる「科学的」心理学を支えている方法論と認識論の歴史的な成立経過を描き出している。▼『聖書の鉱物誌』（島田显郎著、二〇三頁、一九〇〇円）聖書には様々な鉱物ばかりでなく、地球外物質として天から降ってきた隕石、地下資源の探鉱・精錬、地震にまつわる話など鉱物学、地質学、地球科学に関わる記事、物語が記述されている。聖書を地球科学から親しむという視点から綴られた書。

流通経済大学出版会

▼復刻版『文字之教』（全3巻）（和綴製本箱入・二二〇〇〇円・分売不可）

本書は、小学読本として作られたもので、『第一文字之教 全』、『第二文字之教 全』及び『文字之教附録 手紙之文 全』の三巻で一揃えである。

前二巻には、それぞれ四十教程、三三教程、『附録』には二七教程が収録されている。各教程は、漢字を大文字で示し、その漢字を用いた例文を掲げるといって構成になっている。しかも、教程が進むに従ってそれ以前の教程で学んだ漢字を例文の中で繰り返し使っており、子供の理解力を高めるための工夫がなされている。福澤は本書を作った意図について、「唯字ヲ素読スルヨリモ文章ノ義ヲ解ス丁ニ心ヲ用ヒザル可ラス即チ此書ハ子供ヲシテ文章ノ義ヲ解サンメンガタメノ趣向ニテ作タルモノナリ」と。

本書は、原本を出来る限り忠実に復刻したもので、全国の図書館常備、福澤研究者必携の一書であるとともに、国語教育に携わる人にも一読を勧めたい。

三重大学出版会

▼『近代初等国語科教育成立の条件―ロシア共和国の場合―』（藤原和好著・三七七頁・本体五〇〇〇円）本書は、前近代の初等国語科教育が近代的初等国語科教育に発展するためにはどのような条件が必要か？人間観・子供観、母国語の文学理論・言語理論等の状況は、成立する国語科教育の性格にどのような影響を与えるか？等をロシア共和国について検討したものである。特に一八四〇年代から一九一〇年代までの約八〇年間におけるラスビーチエ・リエチ（言語能力育成）理念の成立過程を近代国語教育の指標として段階的に明らかにすると共に、国語科教育の各領域に関して分析している。入手が非常に困難なロシア革命前の資料を丹念に収集し、国民学校等の教師達からトルストイにいたるまで、様々な理論や実践の記録を駆使して解明されている。そのほか、ロシアにおける近代以前の国語教育、ロシア革命後における言語能力育成理念の研究史、ロシアと日本の初等国語教育比較研究、等についても分析されており、比較国語教育、国語科教育法等を学ぶ者には必読書である。

新刊案内 '00・15'00・3

北海道大学図書刊行会

日本産哺乳類頭骨図説
ウスバキチョウ
阿部 永 九〇〇〇円
渡辺 康之 一五〇〇〇円
中村睦男・秋山義昭・千葉 卓・
常本照樹・斎藤正彰編 二八〇〇円
桑原真人・田中彰編著 七五〇〇円
高木俊輔・渡辺浩一編著 八五〇〇円

平野弥十郎幕末・維新日記
日本近世史科学研究所史料空間論への旅立ち
吉野 悦雄 二二〇〇〇円
本堂武夫編著 一六〇〇〇円
大谷 諄 一〇〇〇〇円

複数民族社会の微視的的制度分析—リトアニアにおける
ミクロストーリーア研究—
Physics of Ice Core Records
Wood Micromorphology
—An Atlas of Scanning Electron Micrographs—
多田 謙 一〇〇〇〇円

聖学院大学出版会
近代日本キリスト者の信仰と倫理
鶴沼 裕子 三六〇〇円

麗澤大学出版会
企業倫理のすすめ—ECCS2000と企業倫理法令遵守の仕組み
高 巖 六〇〇〇円
鬼来迎—日本唯一の地獄芝居
生方 徹夫 五八〇〇円

慶應義塾大学出版会
Keio UP選書 近代トルコ見聞録 長場 紘 二〇〇〇円

多国籍交渉の理論と応用—国際合意形成へのアプローチ
確氷 尊監訳／熊谷 聡・蟹江憲史訳 三四〇〇円
地域研究講座 アジアの金融・資本市場—危機の内層
マグナ・カルタ J・C・ホルト／森岡敬一朗訳 一八〇〇〇円
Keio UP選書 知的創造時代の知的財産
清水啓助編著 二〇〇〇円
Keio UP選書 東京のグランドデザイン
—都市経営フォーラム講演録 伊藤 滋 二二〇〇円
19世紀フランス文学事典 古屋健三・小瀧昭夫編 八〇〇〇円
日本文化の源流をたずねて 総野 和子 三四〇〇円
第二の故郷 三田の山 池井 優 二五〇〇円
インプロヴィゼーション・テクノロジーズ日本版
ウィリアム・フォーサイス／松澤慶信日本版監修 六五〇〇円

産能大学出版部
IT時代の「課題達成型」目標管理 浅江季光編著 二二〇〇円
全国安心工務店一覧〈西日本版〉 三島俊介編著 二〇〇〇円
Born to win あなたは勝つために生まれてきた 油橋 重男 一五〇〇円

専修大学出版局
歪む身体—現代女性作家の変身譚—カトリン・アマン
'99開放講座 21世紀への誘い—共存をめざして—
石巻専修大学開放センター編 一四〇〇円

帝人事件 別巻二 専修大学今村法律研究室編 四一七五円

Suruga Bay, Japan—Marine Geology— 良文 一〇〇〇円

■玉川大学出版部

ホタルイカの素顔 奥谷喬司編著 二五〇〇円

文化のインベンション

日本の近代化と知識人〈若き日本と世界Ⅱ〉 二〇〇〇円

ニホンミツバチの飼育法と生態 吉田 忠晴 二〇〇〇円

東海大学外国語教育センター異文化交流研究会編 文化の仮設性―建築からマンガまで―〈記号学研究20〉 三〇〇〇円

多文化教育の国際比較―エスニシティへの教育の対応― 江原武一編著 六七〇〇円

復活へトルストイ三大長編 第一回配本 北御門二郎 二八〇〇円

怒れる西部―傷つきやすい大地とその将来― R・ラム&M・マッカーシー／井出・青木・小塩 五八〇〇円

都市化とダニ ―コンクリート建造物のコケに生息するササラダニ類― 青木 淳一 九〇〇〇円

高等教育の変貌と財政 市川 昭午 四〇〇〇円

血液細胞アトラス― イラストと写真でみる血液細胞の実践的読み方― 太田 保世 二二〇〇円

日本・中国高等教育と入試―二二世紀への課題と展望― 中島直忠編 八〇〇〇円

虚数の情緒―中学生からの全方位独学法― 吉田 武 四三〇〇円

現代アメリカ大学生群像―希望と不安の世代― A・レヴィーン&J・キュアトン／丹治めぐみ訳 二九〇〇円

風のことろ―ひとのかたちと憂き世のかたち― 米澤 茂 七五〇〇円

シユライアーマツハの思想と生涯 ―遠くて近いヘーゲルとの関係― 増渕 幸男 三八〇〇円

宮澤賢治の法華文学 ソクラテス研究序説 バルト三国史 鈴木 徹 二八〇〇円

中央大学出版部

日本淡水動物プランクトン検索図説 水野寿彦・高橋永治編 一八〇〇〇円

ドイツ不法行為法論文集 U・フーバー他／吉田 豊・吉田勢子訳 七三〇〇円

アジア産蝶類生活史図鑑Ⅱ 五十嵐邁・福田晴夫 四八〇〇〇円

「近代化」論の転回と歴史叙述―政治変動下のひとつの史学史― 金原 左門 二五〇〇円

大学生のためのコンピュータ入門テキスト 三木 容彦 二八〇〇円

ハイデッガーの迷宮―二十世紀の政治思想― 南原 一博 二六〇〇円

新高校現代文明論 やってみよう物理 高校物理副読本編集委員会編 一〇〇〇円

ワグナーの世紀 ―オペラをとおして知る十九世紀の時代思潮― 三富 明 三三〇〇円

Bulletin of Diagnostic Ultrasound—Superficial organs— 久保田光博編著 一一〇〇〇円

東海大学出版会

久保田光博編著 一一〇〇〇円

新音楽史 改訂版

久保田光博編著 一一〇〇〇円

村井範子・松前紀男・佐藤 馨・秋岡 陽共訳 二〇〇〇円

久保田光博編著 一一〇〇〇円

村井範子・松前紀男・佐藤 馨・秋岡 陽共訳 二〇〇〇円

久保田光博編著 一一〇〇〇円

村井範子・松前紀男・佐藤 馨・秋岡 陽共訳 二〇〇〇円

久保田光博編著 一一〇〇〇円

村井範子・松前紀男・佐藤 馨・秋岡 陽共訳 二〇〇〇円

久保田光博編著 一一〇〇〇円

村井範子・松前紀男・佐藤 馨・秋岡 陽共訳 二〇〇〇円

久保田光博編著 一一〇〇〇円

村井範子・松前紀男・佐藤 馨・秋岡 陽共訳 二〇〇〇円

久保田光博編著 一一〇〇〇円

村井範子・松前紀男・佐藤 馨・秋岡 陽共訳 二〇〇〇円

久保田光博編著 一一〇〇〇円

村井範子・松前紀男・佐藤 馨・秋岡 陽共訳 二〇〇〇円

久保田光博編著 一一〇〇〇円

村井範子・松前紀男・佐藤 馨・秋岡 陽共訳 二〇〇〇円

久保田光博編著 一一〇〇〇円

村井範子・松前紀男・佐藤 馨・秋岡 陽共訳 二〇〇〇円

久保田光博編著 一一〇〇〇円

村井範子・松前紀男・佐藤 馨・秋岡 陽共訳 二〇〇〇円

久保田光博編著 一一〇〇〇円

村井範子・松前紀男・佐藤 馨・秋岡 陽共訳 二〇〇〇円

久保田光博編著 一一〇〇〇円

■東京大学出版会

東京大学は変わる―教養教育のチャレンジ

浅野攝郎・大森 彌・川口昭彦・山内昌之編 二〇〇〇円

講座社会学9 政治 間場寿一編 三〇〇〇円

学校・職安と労働市場―戦後新規学卒市場の制度化過程

荻谷剛彦・菅山真次・石田 浩編 六〇〇〇円

アメリカの多民族体制―「民族」の創出

五十嵐武士編 五八〇〇円

国際文化論 平野健一郎 二五〇〇円

比較不能な価値の迷路―リベラル・デモクラシーの憲法理論

長谷部恭男 三八〇〇円

マクロ経済と金融システム

福田慎一・堀内昭義・岩田一政編 四〇〇〇円

実践としての統計学 佐伯 胖・松原 望編 二六〇〇円

帝国議会貴族院委員会速記録 昭和篇120 国立国会図書館所蔵 一四〇〇〇円

帝国議会衆議院委員会速記録 昭和篇156 国立国会図書館所蔵 一八〇〇〇円

表象―構造と出来事〈表象のディスクール〉

小林康夫・松浦寿輝編 三二〇〇円

現代中国の構造変動1 大中国へへの視座

毛里和子編 三六〇〇円

現代中国の構造変動2 経済―構造変動と市場化

中兼和津次編 三六〇〇円

文学の思考―サントロブーヴからブルデューまで

石井洋二郎 二八〇〇円

考古学の方法―調査と分析 藤本 強 二七〇〇円

明恵上人資料 第五 高山寺資料叢書20

高山寺典籍文書綜合調査団編 二四〇〇〇円

織豊系城郭の形成 千田 嘉博 六四〇〇円

企業保障と社会保障 武川正吾・佐藤博樹編 四六〇〇円

循環と成長のマクロ経済学 吉川 洋・大瀧雅之編 四五〇〇円

オブション評価と企業金融の理論 池田 昌幸 七四〇〇円

植物の系統〈多様性の植物学2〉

岩槻邦男・加藤雅啓編 四六〇〇円

河川生態環境評価法―潜在自然特性を軸として

玉井信行・奥田重俊・中村俊六編 三六〇〇円

デジタルカラー画像の解析・評価 三宅 洋一 三八〇〇円

日本人のからだ―解剖学的変異の考察

佐藤達夫・秋田恵一編 三〇〇〇円

帝国議会貴族院委員会速記録 昭和篇121 国立国会図書館所蔵 一四〇〇〇円

帝国議会衆議院委員会速記録 昭和篇157 国立国会図書館所蔵 一八〇〇〇円

王朝語辞典 秋山 虔編 六八〇〇円

テクスト―危機の言説〈表象のディスクール2〉

小林康夫・松浦寿輝編 三二〇〇円

The Expanding Universe of English II 東京大学教養学部英語部会編 一九〇〇円

The Expanding Universe of English III [テキスト+CD4枚] 東京大学教養学部英語部会編 三八〇〇円

英語の作法 斎藤 兆史 二五〇〇円

アメリカン・ライフへのまなざし―自然・女性・大衆文化

瀧田 佳子 三五〇〇円

日英交流史 1600-2000 1 政治・外交I

木畑洋一、イアン・ニッシュ、細谷千博、田中孝彦編 四六〇〇円

講座社会学7 文化 宮島 喬編 二八〇〇円

現代中国の構造変動3 ナショナルリズム―歴史からの接近

西村成雄編 三六〇〇円

民法I〔第2版 補訂版〕 内田 貴 三二〇〇円

近代個人主義と憲法学―公私二元論の限界

中山 道子 五二〇〇円

パピロニアの数学

近畿の活断層

岡田篤正・東郷正美編 三〇〇〇円

岩石形成のダイナミクス

坂野昇平・鳥海光弘・小畑正明・西山忠男 五二〇〇円

植物の世界〈多様性の植物学1〉

岩槻邦男・加藤雅啓編 四六〇〇円

教養としてのスポーツ・身体運動

東京大学身体運動科学研究室編 二四〇〇円

地域看護診断―技法と実際

金川克子編 二八〇〇円

帝国議会貴族院委員会速記録

昭和篇122

国立国会図書館所蔵 一四〇〇〇円

帝国議会衆議院委員会速記録

昭和篇158

国立国会図書館所蔵 一八〇〇〇円

■東京電機大学出版局

大気圏の環境

かんたんMathematica活用ガイド 有田正光編著 二八〇〇円

Mathematicaによる量子物理学

吉田 賢史 一七〇〇円

Mathematicaによる電磁気学〔第2版〕

松本 紳 三二〇〇円

統計学の基礎〈工科系数学セミナー〉

川瀬 宏海 三七〇〇円

常微分方程式〈工科系数学セミナー〉

鈴木 皖之 二二〇〇円

ファイナンスのための確率微分方程式

鶴見和之他著 二二〇〇円

―ブラックシヨールズ公式入門―

トーマス・シコシュ／遠藤 靖訳 三三〇〇円

制御・数値解析のためのMATX

古賀 雅伸 三五〇〇円

Linux・WindowsによるMATXによる数値計算

古賀 雅伸 五〇〇〇円

MATLAB/SimulinkによるCDMA

真田 幸俊・サイバネットシステム(株)共著 二五〇〇円

電気通信概論〔第3版〕〈理工学講座〉

荒谷 孝夫 二七〇〇円

伝送回路〈理工学講座〉

菊地憲太郎 二八〇〇円

デジタル1種工事担任者試験問題集〈合格精選400題〉

吉川 忠久 二〇〇〇円

電波法規〈1・2陸技受験教室〉

吉川 忠久 二〇〇〇円

PCシーケンス制御〈12週間でマスター〉

吉本 久泰 二八〇〇円

図解Z80 マイコン応用システム入門

ソフト編〔第2版〕 柏谷英一他著 二九〇〇円

■東京農業大学出版会

法政大学出版局

考える／分類する―日常生活の社会学―

G・ペレック／阪上脩訳 一八〇〇円

後期ギリシア科学―アリストテレス以後―

G・E・R・ロイド／山野耕治・他訳 三五〇〇円

桶と樽―協役の日本史―

小泉和子編 七八〇〇円

ル・ゴフ自伝―歴史家の生活―

J・ル・ゴフ／鎌田博夫訳 三二〇〇円

人間的なるものの庭―歴史人間学論集―

C・F・v・ワイツゼッカー／山辺建訳 九三〇〇円

言葉と世界―ヴィルヘルム・フォン・フンボルト研究―

亀山 健吉 四五〇〇円

政治的なものの変貌―部族化／小集団化する世界―

M・マフェゾリ／古田幸男訳 三三〇〇円

合せもの〈ものとの人間の文化史94〉

増川 宏一 二八〇〇円

バーク政治経済論集―保守主義の精神―

E・バーク／中野好之編訳 二三五〇〇円

身体の哲学と現象学―ビラン存在論についての試論―

M・アンリ／中敬夫訳 四五〇〇円

木綿口伝〈ものとの人間の文化史93〉〔第2版〕

ベンヤミンの現在

福井 貞子 三二〇〇円

朝鮮王朝社会と儒教〈韓国の学術と文化2〉

N・ボルトツ、W・レイイエン／岡部仁訳 二〇〇〇円

異教入門―中心なき周辺を求めて―

李泰鎮／六反田豊訳 三五〇〇円

神話の真理

J・F・リオタール／山縣熙・他訳 二八〇〇円

方法3―認識の認識―

K・ヒュプナー／中才敏郎・他訳 七六〇〇円

国際労働力移動のグローバル化―外国人定住と政策課題―

E・モラン／大津真作訳 四五〇〇円

〈比較経済研究所研究シリーズ15〉森 廣正編

四八〇〇円

アジア・太平洋における地方の国際化

〔法政大学現代法研究所叢書19〕鈴木佑司編著 二八〇〇円

哲学51号―特集・行為論の現在―

日本哲学会編 二〇〇〇円

スポーツ社会学研究第8巻―特集・スポーツの20世紀―

日本スポーツ社会学会編 一九〇〇円

■放送大学教育振興会

教育の歴史〔新訂〕

佐藤 秀夫 二二〇〇円

家庭・学校と地域社会

岡崎 友典 二四〇〇円

学習の心理学

今田 寛 二二〇〇円

人格心理学〔改訂版〕

鈴木乙史・佐々木正宏 二四〇〇円

現代精神分析学

牛島 定信 二二〇〇円

発達と学習

永野 重史 二六〇〇円

教育の政治経済学

金子元久・小林雅之 二六〇〇円

現代人のための哲学

渡邊 二郎 二六〇〇円

現象学入門

千田 義光 一八〇〇円

宗教の哲学〔改訂版〕

量 義治 二二〇〇円

中世日本文学の遠景

久保田淳・島内裕子 二二〇〇円

上代の日本文学〔新訂〕

多田 一臣 二二〇〇円

国文学入門

堀 信夫・野山嘉正 二二〇〇円

老荘思想〔改訂版〕

池田 知久 四〇〇〇円

ギリシャ・ローマ文学

逸身喜一郎 三八〇〇円

古典古代の歴史

伊藤 貞夫 二四〇〇円

19世紀日本の歴史

三谷 博・山口輝臣 二二〇〇円

朝鮮の歴史と社会

吉田 光男 二二〇〇円

南アジアの文化を学ぶ

辛島 昇 二四〇〇円

アメリカの歴史〔改訂版〕

紀平 英作 二六〇〇円

イメージの歴史

若桑みどり 三六〇〇円

応用音楽学

山口 修 三〇〇〇円

日本音楽の基礎概念〔改訂版〕

竹内 道敬 一八〇〇円

博物館資料論

石森 秀三 二二〇〇円

博物館経営・情報論

石森 秀三 二二〇〇円

文化人類学

江淵 一公 二二〇〇円

家族と生活ストレス

石原 邦雄 二六〇〇円

生活者の経済

御船美智子 三二〇〇円

現代モード論

北山晴一・酒井豊子 二四〇〇円

食物とからだ

野口 忠・今井悦子 二四〇〇円

食生活をめぐる諸問題

豊川 裕之 二四〇〇円

循環器科学

藤島正敏・近藤喜代太郎 二六〇〇円

母子の健康科学

日暮 眞・近藤喜代太郎 二四〇〇円

薬の歴史・開発・使用

津谷喜一郎・仙波純一 二〇〇〇円

高齢者の心と身体

折茂 肇・近藤喜代太郎 二四〇〇円

年金・医療保険論

木村 陽子 三〇〇〇円

法学入門

田中 成明 二四〇〇円

日本の法システム

六本 佳平 四六〇〇円

法と裁判〔新訂〕

青山善充・井上正仁 一八〇〇円

経済法〔新訂〕

根岸 哲 二八〇〇円

国際政治

高橋 和夫 三二〇〇円

政治学入門〔新訂〕

阿部 齊・久保文明・山岡龍一 二二〇〇円

比較政治学

真柄秀子・井戸正伸 一八〇〇円

現代の行政〔改訂版〕

森田 朗 二〇〇〇円

財政学〔新訂〕
 経済学入門
 情報産業論
 現代ファイナンス入門
 社会の中の会計
 経営工学総論〔新訂〕
 社会福祉入門
 都市社会の人間関係
 環境アセスメント〔改訂版〕
 電子技術と社会
 情報基礎管理学〔改訂版〕
 ネットワーク産業論
 産業人間工学
 設計学
 都市と生活空間の工学
 プログラミング入門
 線型代数Ⅱ〔新訂〕
 解析学〔新訂〕
 統計の考え方〔改訂版〕
 物性物理学入門
 光と物質
 植物の生理
 動物の行動と社会〔新版〕
 宇宙像の変遷と人間
 地球とその歴史
 宇宙とその歴史
 中国語Ⅲ(00)
 共生の時代を生きる
 現代生活論
 認知科学
 舞台芸術の現在

宮島 洋・井堀利宏 一八〇〇円
 新飯田 宏 二四〇〇円
 西村 吉雄 一六〇〇円
 大塚 宗春 二四〇〇円
 三代澤経人・齋藤正章 二四〇〇円
 辻 正重 四〇〇〇円
 岡本民夫・三ツ木一 二四〇〇円
 森岡 清志 二二〇〇円
 原料 幸彦 二八〇〇円
 後藤 尚久 二四〇〇円
 高橋 三雄 三〇〇〇円
 直江 重彦 三〇〇〇円
 池田 良夫 二四〇〇円
 吉川弘之・富山哲男 二六〇〇円
 阪本 一郎 二二〇〇円
 都倉 信樹 三二〇〇円
 長岡 亮介 二〇〇〇円
 熊原 啓作 二八〇〇円
 藤原 望 三四〇〇円
 藤原 毅夫 二六〇〇円
 伊藤 道也 三二〇〇円
 山田晃弘・菊山宗弘 三〇〇〇円
 日高 敏隆 二二〇〇円
 金子 務 三三〇〇円
 濱田 隆士 三二〇〇円
 杉本大一郎 三〇〇〇円
 代田 智明 一八〇〇円
 酒井豊子・森谷正規 二四〇〇円
 松村 祥子 二二〇〇円
 相場 覚・西川泰夫 三〇〇〇円
 渡邊 守章 二六〇〇円

現代生物科学 山田晃弘・中澤 透 二八〇〇円

■明星大学出版部

■早稲田大学出版部
 「ヨーロッパ」の歴史的再検討 鈴木健夫編 三五〇〇円
 国際法務戦略 奥島孝康・堀龍兒編 三二〇〇円
 ルターの政治思想―その生成と構造― 木部 尚志 四七〇〇円
 〈詩画集〉詩よ墓より語れ

R・ブレア詩、W・ブレイク挿画／出口保夫訳 五〇〇〇円
 漱石の東京(Ⅱ) 武田 勝彦 二八〇〇円
 ファシズムを超えて H・J・ラスキ／堀真清訳 三六〇〇円
 認知心理学ワークショップ―実験で学ぶ基礎知識―

西本武彦・林静夫編 三〇〇〇円
 新時代の社会哲学―近代的パラダイムの転換―〔新装版〕 田村 正勝 三六〇〇円
 内田 満 四七〇〇円

内田満政治学論集(全3巻)第1巻配本／第1巻 内田 満 四七〇〇円
 日本政治学の一源流 水野祐著作集(全10巻)最終巻配本／第10巻 水野 祐 九〇〇〇円
 通論 日本古代史(Ⅳ)―倭国時代篇―律令時代篇―

水野 祐 九〇〇〇円

■名古屋大学出版会
 ハイエク、ハイエクを語る S・クルスゲ他編／嶋津格訳 三二〇〇円
 保険と年金の経済学 西村 周三 三二〇〇円
 アジア国際通商秩序と近代日本 籠谷 直人 六五〇〇円
 ジョン・ロックの自由主義政治哲学 下川 潔 六〇〇〇円
 北極圏の大気科学―エアロゾルの挙動と地球環境― 岩坂泰信編 六五〇〇円

平安時代彫刻史の研究
捨児たちのルネッサンス
— 15世紀イタリアの捨児養育院と都市・農村 —

伊東 史朗 一、二〇〇〇円
高橋 友子 四八〇〇円

■京都大学術出版会

The Role of Radiation
in the Origin and Evolution of Life

赤星光彦他編著

波動解析と境界要素法
分権・生涯学習時代の教育財政
森の記憶—飛弾・莊川村六蔵の森林史—
〈生態学ライブラリー5〉

小見山 章 二一〇〇円
小林昭一編著 五〇〇〇円
白石 裕 四五〇〇円

東アジア諸言語の研究 I—巨大言語群・シナ・チベット語族の展望—

地域形成の論理〈地域研究叢書9〉
盆地世界の国家論—雲南、シブソンパンナーのタイ族史—
〈地域研究叢書10〉

地域発展の固有論理〈地域研究叢書11〉
パクス・ブリタニカと植民地インド
脳とワーキングメモリ

西田 龍雄 九〇〇〇円
坪内良博編著 四二〇〇円
加藤久美子 四二〇〇円
原洋之介編著 四五〇〇円
今田 秀作 五二〇〇円
李阪直行編 七〇〇〇円

■大阪経済法科大学出版部

7・8世紀の東アジア—東アジアにおける文化交流の再検討—

村川行弘監修／大阪経法大・北京大学考古学系編 二六〇〇円
東北アジアにおける経済開発と環境保全

南 正院監修／大阪経法大・延辺大編 二六〇〇円

■大阪大学出版会

骨はどのようにしてできるか—軟骨分化の謎を探る—

鈴木不二男 四〇〇〇円

触媒作用—活性種の挙動—
書芸術の地平—その歴史と解釈—
日本昔話の構造と語り手
国際民事証拠共助法の研究
国際交流フォーラム

今中 利信 三四〇〇円
萱 のり子 八〇〇〇円
川森 博司 六八〇〇円
多田 望 六〇〇〇円
近世の大坂
脇田修&J・M・マクレイン編 三〇〇〇円

■関西大学出版部

教育新生への視座
中国思想研究
21世紀の情報専門職をめざして
日本古代史稿

小川 正 二五〇〇円
坂出 祥伸 七〇〇〇円
倉橋英逸ほか 二八〇〇円
網干 善教 三五〇〇円

■九州大学出版会

認知考古学の理論と実践的研究
— 縄文から弥生への社会・文化変化のプロセス —
イギリス資本市場の形成と機構
中・近世西欧における社会統合の諸相
台湾アミ族の宗教世界
ヨーロッパ中世古文学

松本 直子 七〇〇〇円
稲富 信博 六〇〇〇円
田北廣道編著 八二〇〇円
原 英子 五七〇〇円

マルチメディア時代のドイツ語教育
ジャン・マビヨン／宮松浩憲訳 一四〇〇〇円

田中俊明・田畑義之 四〇〇〇円
戸島 信一 四〇〇〇円
西村重雄・児玉 寛編 八五〇〇円

家族農業経営の再生産機構
日本民法典と西欧法伝統
— 日本民法典百年記念国際シンポジウム —
雲仙火山災害における防災対策と復興対策
— 火山工学の確立をめざして —

高橋 和雄 七八〇〇円
Atlas of Cystic Neoplasms of the Pancreas
山口幸二・田中雅夫 七〇〇〇円
秋坂真史編著 六〇〇〇円

男性百歳の研究

日韓民俗文化比較論

金宅圭 八〇〇円

■東北大学出版会

聖書の鉱物誌

島田 昱郎 一九〇〇円

障害者のリハビリと福祉

永瀨 正昭 一九〇五円

日本植物種子図鑑

中山 至大 一九〇〇円

■流通経済大学出版会

復刻版『文字之教』【全三巻】

福澤諭吉著 一二〇〇〇円

第一文字之教 全

(分売不可)

第二文字之教 全

文字之教附録 手紙之文 全

■三重大学出版会

近代初等国語科教育成立の条件ーロシア共和国の場合ー

藤原 和好 五〇〇〇円

Leitfaden Zur deutschen Kommunikation

都築正則&S・トゥルンマー 二一〇〇円

三重の民俗

三重民俗研究会 二四〇〇円

情報科学概論

濱森太郎編 二二六〇円

ジョン・ウォーカー氏の捕虜生活

松岡 典子 二二六〇円

第21回(一九九九年)日本生命財団出版助成図書

刊行期間 平成十二年四月〜平成十三年三月

①ベルツ日本文化論集

東海大学出版会

エルヴィン・ベルツ著／若林操子編訳(ハイデルベルグ大学日本学研究室専任講師)

②打製骨器論

東京大学出版会

旧石器時代の探求

小野昭(東京都立大学人文学部教授)

③依存と自立の精神構造

法政大学出版局

日本の心性の研究

長山恵一(法政大学文学部教授)

④日本書史

名古屋大学出版会

石川九楊(書家、石川九楊研究室代表)

⑤近代日本と物理実験機器

京都大学学術出版会

京都大学総合人間学部所蔵 明治・大正期物理実験機器

永平幸雄編著(大阪経済法科大学教授・教養部長)

* 日本生命財団は優れた研究成果でありながら出版の困難な学術専門書を対象に大学出版部協会加盟出版部に出版助成を行っている。

大学出版部協会加盟出版部一覽

北海道大学図書刊行会	〒060-0809 札幌市北区北9条西8丁目 北大構内 TEL. 011-747-2308 FAX. 011-736-8605
聖学院大学出版会	〒362-8585 埼玉県上尾市戸崎1-1 TEL. 048-725-9801 FAX. 048-725-0324
麗澤大学出版会	〒277-8686 千葉県柏市光ヶ丘2-1-1 TEL. 0471-73-3331 FAX. 0471-73-3154
慶應義塾大学出版会	〒108-8346 東京都港区三田2-19-30 TEL. 03-3451-6926 FAX. 03-3454-7029
産能大学出版部	〒152-0035 東京都目黒区自由が丘2-16-5 自由が丘昭和ビル TEL. 03-3724-9101 FAX. 03-5701-7499
専修大学出版局	〒101-0051 東京都千代田区神田神保町3-8-3 専修大学4号館 TEL. 03-3263-4230 FAX. 03-3263-4288
玉川大学出版部	〒194-8610 東京都町田市玉川学園6-1-1 TEL. 042-739-8935 FAX. 042-739-8940
中央大学出版部	〒192-0393 東京都八王子市東中野742-1 TEL. 0426-74-2351 FAX. 0426-74-2354
東海大学出版会	〒151-8677 東京都渋谷区富ヶ谷2-28-4 TEL. 03-5478-0891 FAX. 03-5478-0870
東京大学出版会	〒113-8654 東京都文京区本郷7-3-1 東京大学構内 TEL. 03-3811-8814 FAX. 03-3812-6958
東京電機大学出版局	〒101-8457 東京都千代田区神田錦町2-2 TEL. 03-5280-3433 FAX. 03-5280-3563
東京農業大学出版会	〒156-8502 東京都世田谷区桜丘1-1-1 TEL. 03-5477-2562 FAX. 03-5477-2643
法政大学出版局	〒102-0073 東京都千代田区九段北3-2-7 TEL. 03-5214-5540 FAX. 03-5214-5542
放送大学教育振興会	〒105-0001 東京都港区虎ノ門1-14-1 郵政互助会琴平ビル3F TEL. 03-3502-2750 FAX. 03-3592-2482
明星大学出版部	〒191-8506 東京都日野市程久保2-1-1 TEL. 042-591-9979 FAX. 042-593-0192
早稲田大学出版部	〒169-0071 東京都新宿区戸塚町1-103 TEL. 03-3203-1551 FAX. 03-3207-0406
名古屋大学出版会	〒464-0814 名古屋市千種区不老町1 名古屋大学構内 TEL. 052-781-5027 FAX. 052-781-0697
京都大学学術出版会	〒606-8501 京都府京都市左京区吉田本町 京都大学構内 TEL. 075-761-6182 FAX. 075-761-6190
大阪経済法科大学出版部	〒581-8511 大阪府八尾市楽音寺6-10 TEL. 0729-41-8211 FAX. 0729-41-9979
大阪大学出版会	〒565-0871 大阪府吹田市山田丘1-1 大阪大学事務局内 TEL. 06-6877-1614 FAX. 06-6877-1614
関西大学出版部	〒564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35 TEL. 06-6368-1121 FAX. 06-6389-5162
九州大学出版会	〒812-0053 福岡市東区箱崎7-1-146 九州大学構内 TEL. 092-641-0515 FAX. 092-641-0172
東北大学出版会(準会員)	〒980-8577 仙台市青葉区片平2-1-1 東北大学構内 TEL. 022-214-2777 FAX. 022-225-2029
流通経済大学出版会(準会員)	〒301-8555 茨城県竜ヶ崎市平畑120 TEL. 0297-64-0001 FAX. 0297-64-0011
三重大学出版会(準会員)	〒514-8507 三重県津市上浜町1515 三重大学出版ホール内 TEL. 059-232-1356 FAX. 059-232-1356

大学出版(第45号) 2000 春 平成12年4月10日発行 発行所/大学出版部協会

〒113-8654 東京都文京区本郷7丁目3番1号 東大構内 東京大学出版会内 電話03-3812-2111 (内)87956

E-MAIL: mail@ajup-net.com URL: http://www.ajup-net.com/

頒布価格100円 千共